

東日本大震災から15年 アートを共に創り、地域の魅力を掘り起こす

2011年の東日本大震災では、震災直後に筑波大学附属病院の医師・看護師らが被災地に入ったことを皮切りに、本学では多様な専門性を活かしながら復興支援への取り組みを進めてきました。

芸術系 村上史明助教の「体感・体験ラボ」は、そのひとつです。震災後に外遊びができなくなった子どもたちのための活動として2013年に始まったこのプロジェクトは現在、風評被害や観光資源の活用促進の余地などの課題を抱えている福島県柳津町で、復興支援の枠を超えて、地域にゆかりのある版画家の齋藤清をフックに、アートを通じて地域の魅力を発信するプロジェクトへと発展しています。



(今年度の体感・体験ラボに参加した学生)

体感・体験ラボは、被災地域で学生たちが地域住民と協同しながら芸術作品の制作や、ワークショップを行うプロジェクトとして2013年から続いています。2016年からは本学芸術専門学群および芸術学学位プロジェクト(大学院)の授業の一環で、主に福島県柳津町で活動しています。

人口およそ3,000人の柳津町は、東日本大震災による風評被害や観光資源の活用促進の余地、少子高齢化などの課題を抱えています。このプロジェクトでは学生たちが柳津町に3~4日滞在し、地域の方々

へのインタビューなどを通じて地域の魅力や課題を見つけ、それをもとに作品を制作し、柳津町の齋藤清美術館で展示を行います。齋藤清(1907~1997)は晩年を柳津町で過ごした版画家です。

今年度このプロジェクトに参加した13人の学生は、柳津町でのフィールドワークを通して、柳津町名物のあわまんじゅう、赤べこ、ソースカツ丼、雪景色、そして齋藤清の作品など、それぞれ異なるポイントに着目して、立体的なオブジェや絵画、映像、コラージュイラストなど様々な方法で作品として表現しました。



毎年新しい学生が柳津町を訪れ、それぞれが独自の視点から新たな地域の課題や魅力を発見し、唯一無二の作品を制作すること (今年度「体感・体験ラボ」に参加した学生の作品)

が、このプロジェクトの特徴の一つです。新たな作品の誕生をきっかけに、地域の人々が地域の新たな魅力に気づくこともあり、それがこのプロジェクトの継続している理由の一つです。一方、学生たちは地域住民との対話から、地域の課題や魅力を「自分事」として捉える力や、地域の人々と協働しながら作品をつくり上げることで、

大きな学びを得ています。



体感・体験ラボは元々、東日本大震災における原発事故により屋外での遊びが出来なくなった子ども達に遊び場を提供することを目的に、2013年から始まったものです。この頃からの被災地域とのつながりから、現在の柳津町での活動が行われています。

こうした流れの中で斎藤清の魅力を伝えたいという地域の思いを受け、プロジェクトで立ち上げた版画ワークショップは、学生が取り組む中で地域に受け継がれ、現在では地域の人々が中心となっています。また2024年には、斎藤清が戦時中に手掛けた絵本を元に、AR技術を用いてアニメーションとサウンドを付加したメディアアート作品も作り上げています。

(版画ワークショップ)

体感・体験ラボでは、今後も学生が柳津町に実際に滞在し、地域の自然や観光資源、人々の暮らしを題材にした作品づくりや展示を行う予定です。



(AR技術を用いた作品展示)

【本件のお問合せ先】

筑波大学広報局報道担当

E-mail: kohositu@un.tsukuba.ac.jp